



Title	陸法言切韻の復元と唐五代切韻の研究
Author(s)	鈴木, 慎吾
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58813
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	鈴木 慎吾
本籍（国籍）	
学位の種類	博士（言語文化学）
学位記番号	甲 第 79 号
学位授与年月日	平成19年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	陸法言切韻の復元と唐五代切韻の研究
論文審査委員	主 査 教 授 佐々木 猛 副 査 教 授 杉 村 博 文 副 査 教 授 岸 田 文 隆 副 査 京 都 大 学 平 田 昌 司 副 査 神 戸 市 外 国 語 大 学 太 田 斎

論文の内容要旨

1. 本稿の目的、概要

本稿は、隋・陸法言の切韻および唐代切韻諸本のテキストに関する基礎研究である。本稿は現在までに発見されている切韻諸本を網羅的に用い、失われて伝わらない陸氏原本切韻の再構を行った。

このような試みは、これまで李永富氏の『切韻輯斟』があるのみであった。しかし、李氏のそれは材料の選択と再構作業の原則の両面において十分でない部分があるために、その成果も最善のものとは言い難い。本稿は特にその二点（材料の選択、再構作業の原則）に特に重点をおいた上で作業を行った。

陸本再構においては、字体や体例等、解決すべき様々な問題がついてまわる。本稿ではこれらの問題に対し現存諸本を比較検討した上で陸本の形式を定めた。

以上の成果は、今後陸法言切韻および唐代韻書のテキストを研究する上での土台となるのではないと思う。

2. 構成

【研究篇】

本稿の目的である陸氏切韻の再構に関し、材料となる資料をそれぞれ検討し、その上で本稿の目的にかなう適切な作業方法について述べ、また陸氏切韻のテキストに関する諸問題を論じた。

【再構篇】

資料篇に収録した切韻諸本の内容を、研究篇2に示した方法により整理、分析し、陸氏切韻のテキストを再構。

【資料篇】

本稿の作業における基本材料を収録。それぞれの資料およびそれらの選択については研究篇の1で論じた。

3. 内容

【研究篇】

1. 陸本再構の基本資料

・既刊書考察

切韻の各種既刊模写本の内容を検討。それぞれの資料につき、特に原巻の行方、写真（等）の流布、学者の訪欧調査、模写の経緯、既刊模写本との関係、出版の経緯、後の研究における影響などに重点をおいて検討した。

・上掲書未収の切韻残巻

敦煌吐魯番文献のうちに、従来の切韻研究では知られていなかった切韻残巻があることを確認し、その内容を検討した。スタイン本3種、ペリオ本1種、オルデンプルグ本1種、ベルリン本4種、大谷本4種。（うち、スタイン本、ペリオ本、オルデンプルグ本と、ベルリン本の一部はすでに『開篇』Vol.23, 2004 掲載論文で公表した。）

・本稿における基礎資料選択方針

本稿が主たる拠り所とする上田正『切韻残巻諸本補正』の内容を検討。

・『補正』は字体について厳密に記述していないことを実例を挙げて指摘。

・『補正』の内容をその記述形式により5つに分類。

・『補正』の5類それぞれの内容を検討し、本稿の基本資料を決定。

・写真による校勘

本稿では『補正』のほか、各種図録本および原巻の写真を用いてテキストの校勘を行った。ここではそれらを挙げた。

2. 陸本再構作業の原則

・切韻諸本の増補状況を概観

切韻諸本における増補が、一般に底本のテキストの後に付け足すような形でなされており、これは小韻・韻字・注文のどの階層においても同じであることを確認。

・基本原則の設定

一貫した方針で再構を行うための原則を設定。

・第一原則：切韻諸本の各階層において、先頭より同順で並ぶ要素を陸本由来部分とする。

切韻諸本の増補には「典型的なあり方でない」増補や、またテキストの乱れが多く存在するために、第一原則の運用だけでは正しい結果が得られない。このために第二原則を設定する。

・第二原則：切韻諸本の内容を比較し、個別テキストにおける韻字順の転倒、韻字の誤脱、不規則な増加字を判定。

第一原則による再構作業では、現存する切韻諸本全てが同じ字を同じ順で増加している場合、これを増加字と判定する手段がない。これを部分的に補うために第三原則を設定する。

・第三原則：小韻代表字の注に見える「○加△」の記述によって増加字を区別する。

以上の原則を運用する上では、どれを優先的に適用するかが問題となる（特に第二原則）。これはそれぞれのテキスト間の関係を考えて判断することになる。

- ・第四原則：諸本間の親疎関係をもとに、どの要素がより古い段階の写本に遡ることができるのかを考えて陸本のテキストを判断する。

- ・字体の扱い

字体の差をどの程度まで有意なものとして扱うかは作業上大きな問題となるが、本稿では切韻諸本のテキストにおけるそれらを区別する具体的な記述の有無を最大の拠り所とした。

- ・李永富『切韻輯輯』の問題点

使用している材料の問題

再構作業の原則に関する問題

3. 陸氏切韻の検討

- ・全体の字数

- ・本稿再構テキストの字数：11149 字

上平：2315、下平：2246、上：2087、去：2344、入：2157

これは、王仁昫本卷頭記載の「旧韻」の字数とほぼ一致。

→若干の誤差を考慮すると、陸本の字数は11130 字程度と推定される。

- ・王国維氏以来の陸本11500 字説は、『式古堂書画彙考』の「今加三千五百字、通舊總一萬五千文」のみによっており、根拠が薄い。

- ・陸本で用いられる字体について

- ・後に「通俗」とされる字体が多く用いられている。

・異体字注は「或作」「古作」「俗作」のみ。またこれらはほぼ全てが文字の構成要素の交替による異体字。

- ・字体に関する説明的な注記なし。

- ・陸序にも字体に関する記述なし。

→陸本では、(後によく言われる)字体の正俗の問題に注意が払われていた形跡はほとんどなく、切韻諸本で字体の正俗が問題にされるのは唐代に入ってから正字の学が盛んになってからと考えられる。(陸本の字体に関するこの部分の論証は『開篇』Vol.24, 2005 掲載拙稿をもとにしている。)

- ・陸本の様々な部分における体例

- ・序題、卷首題、韻首、朱写、韻目表、上下平声、卷末題、同字省略符号

- ・韻首：改行、提頭。韻字数なし。

- ・韻目表：反切、韻目、五家韻書に関する注の順
韻字数なし。

徳 紅	(五家分合……) ……………
--------	-------------------

【再構篇】

- ・切韻諸本小韻表
- ・切韻諸本韻字表
- ・切韻諸本注文彙考

残存する切韻諸本の内容を小韻、韻字、注文の階層ごとに比較可能な形で書き出し、そ

れらに陸本再構の原則を当てはめて推定される陸本のテキストを示した。また、それぞれの個別部分の推定において問題がある場合は按語でそれを記した。

・陸氏切韻再構本

上記の推定作業の結果得られたテキストにより復元される陸氏切韻を記した。全体の様々な体例は研究篇の3で検討した結論に基づく。

【資料篇】

・切韻諸本資料総表

既刊書における切韻諸本の収録状況を整理した一覧表。

・切韻諸本残存分布図

切韻諸本の残存状況を巻ごとに示した図。

・切韻諸本校本

本稿が使用した切韻諸本の校本。大部分は『補正』によっているが、一部『補正』を用いていないものもある。これらにつき、原巻写真を参照しうるものについては全て、再度のチェックを行った。

4. 今後の研究

- ・本稿の執筆には陸氏切韻の再構にほとんどの時間を費やし、それを利用した研究の段階にはほとんど入ることができなかった。この部分は今後の課題である。
- ・本稿の成果は、陸本の成立に関する研究の有力な材料になると思われる。
- ・また、切韻諸本の増補の様相、継承関係を改めて調査する上での起点となりうると思われる。
- ・本稿の陸本再構のうち、注文の部分は未完であり、その部分については陸本推定の根拠を示せていない。今後この部分を埋める必要がある。また、特に注文の推定においては他書に見られる切韻逸文も本格的に検討する必要がある。
- ・唐代の字体研究において、切韻諸本に見られる字体から得られることは多いと思われる。しかしこの方面は、いまだほとんど研究されていないようである。本稿の字体に関する研究は陸本再構の必要からなされたものであるが、切韻諸本の字体を更に調査し、また切韻以外の資料も用いて唐代字体の一般的な研究に発展させる必要がある。

論文審査の結果の要旨

1. 論文要旨

隋の陸法言の『切韻』五巻は詩の押韻の規範を示した rhyme dictionary であるが、唐代に作詩の盛行とともに漢字音の体系を形成し、その後の漢字音の礎を作った中国言語学史上の重要な文献である。しかしその原本は失われて久しい。

宋初に刊行された増補版の『廣韻』、近年に発見された唐代の王仁昫『刊謬補欠切韻』が今日に残るわずかな完本である。従来はこれによって『切韻』の表す漢字音の体系の研究が行われてきた。その関心の中心は伝統的な注音法である反切にあるが、本研究は諸本の反切にのみ注意を傾ける従来の研究態度に疑問を抱き、数多く発見された唐五代の『切韻』残巻のすべてを検討することによって、陸法言『切韻』の元の姿の復元をめざしたものである。

主な資料は敦煌・トルファンから発見された唐五代の『切韻』残巻である。

これまで同様の試みとして李永富の『切韻輯斟』(1973)があるが、参照した資料が少なく、かつその扱い方にも問題があつて所期の目的を達成しているとはいえない。

本研究は現在得られる最善の資料と方法によって行つた陸法言『切韻』の復元の試みである。

本論文は「研究篇」「再構篇」「資料篇」の三部から成る。あわせて1661ページに上る大作である。その概要は後ろに添付する本人による要約に詳しく述べられているので、ここでは目次を挙げるにとどめる。

「研究篇」133 ページ。

0. 本稿の目的
1. 陸本再構の基本資料
2. 陸本再構作業の原則
3. 陸氏切韻の検討
4. 終章
5. 参考文献

「再構篇」1199 ページ。

1. 切韻諸本小韻表
2. 切韻諸本韻字表
3. 切韻諸本注文彙考 (未完)
4. 陸氏切韻再構本

「資料篇」329 ページ。

1. 切韻諸本資料総表
2. 切韻諸本残存分布図
3. 切韻諸本校本

2. 審査要旨

本論文は現在までに発見されている『切韻』諸本によって、すでに失われた隋の陸法言の『切韻』原本の復元を行つたものである。

審査は資料の選択とその吟味、復元作業の原則、及び再構本の書誌学的性格とその信頼性について行われたが、審査員一同まずその膨大なる作業量に圧倒された。

まず資料となる『切韻』諸残巻について、従来知られていた資料をその形式にしたがつて系統的に分類し基礎資料として策定したこと、更に図録や写真によってそれに校勘を加えたこと、唐五代『切韻』諸本の増補のありさまの原則を発見して、その原則にもとづいて陸法言の原本の再構をめざしたこと、が承認された。

従来にない厳密なる文献批判と網羅的な資料の扱いによって、その再構の信頼性は多くの専門家に評価されることであろう。研究資料の整備とともに出るべくして出た研究であり、現在の段階における作業仮説としては水準に達している。本研究は書誌学的な研究が主であるが、これにもとづいて校勘学的な研究が必要となるであろう。

再構された陸法言『切韻』が字体についても元の姿を復元しようとしているように、本研究は異体字等についても大きな注意を払っているが、このことも評価に値する。唐

代を通じて陸氏の原本が増補されていく過程において、字体の統一・正字の採用が顕著に見られるが、従来『切韻』の研究はその表す音韻体系に関心が集中していて『切韻』における字体の問題は等閑視されてきたのである。

また当時の韻書の体裁である「旋風装」或いは「龍鱗装」と称されるかたちに復元していることも審査員の興味を引いた。

未完成の部分と残された課題はあるが、本論文の学問的評価を損ねるものではなく、本論文によって復元された陸法言『切韻』原本はこれからの『切韻』研究において必見の文献になることが予測される。資料の解題と復元の手順を簡潔にまとめたものを附して早くに出版すべきであるという意見が最後にでた。

上記の理由によって審査委員会は一一致して博士の学位論文として十分な価値があるとの結論に達した。